ヤスクニ通信　No.286　2024 年 2 月 16 日　例会　毎月第3金曜　7:00～9:00pm（休日の時第 4 金）
発行　靖国神社国営化反対福音主義キリスト者の集い（略称「つどい」）　代表・星出卓也（Tel/Fax042-458-0251）
事務局　西東京市柳沢 2-11-13 西武柳沢キリスト教会気付　HP https://yasukuninotsudoi.christian.jp/

ヤスクニ・レポ　286
信仰に基づく憲法 9 条

石上俊雄（日本同盟基督教団土浦めぐみ教会員/憲法 9 条の会つくば）

私は 20 代後半に東アフリカのケニアに国際協力の仕事で駐在していました。そして、帰国直前の 1989 年 1 月 1 日にナイロビの Good Shepherd Africa Gospel Church というプロテスタントのインターナショナル教会で受洗しました。日本でも教会に通った時期もありましたが、自分の理性で納得できないことは信じられず、求道者として優柔不断でした。しかし、ケニア赴任を機会として、当時、日本から宣教師としてケニアのナクルという地方都市で牧会していた牧師先生から勧められて、ナイロビのその教会の礼拝につながったのでした。ナイロビは国際都市で、その教会にはケニアだけでなくアフリカ各国から、また欧州、北米、アジア諸国から様々な国籍のクリスチャンが集っていました。国も民族も文化も異なる人々が、イエス・キリストの十字架の贖いによる救いを信じる共通の土台で、違いを超えて、兄弟姉妹として一つとなっていることに感動しました。そして、ここで信じることなく、日本に帰国したら曖昧な生き方をしている自分は一生信じる機会がないのではないかという思いが迫ってきて、帰国直前に他の 3 人のケニア人とともに受洗したのでした。

こうして神様の一方的なめぐみによって、罪赦された者ですが、時に雑念邪念が働く、凡庸な生身の人間です。それでも、新約聖書に記されているイエス・キリストのことばと行動によって、神は愛であることを信じています。聖書のみことばには、人生の土台となる聖句がたくさんありますが、私は特に、マタイによる福音書の 5 章 9 節の「平和をつくる者は幸いです。」のみことばを、生きる指針としています。尊敬する西川重則先生もその著書『わたしたちの憲法』のあとがきの結びに、この聖句を引用されていますが、先生は「平和をつくる者」を体現されていました。私は決して信心深い者ではありませんが、生きる証しとして、「平和をつくる者」として主に用いていただきたいと願っています。

この聖句で注目するのは、「平和をつくる者」の「つくる」ということばです。英語の聖書では、「平和をつくる者」は”Peacemakers”と訳されています。「平和な者」でも「平和を守る者」でもなく「平和を待ち望む者」でもなく「平和をつくる者」とイエス様は語りました。「つくる」とは能動的な行為、まず「つくろう」という意志が働き、実際に「つくる」という行為を実践することです。「平和」とは何でしょうか？「平和」とは私たちのいのちと安全な暮らしが守られ、ひとりひとりの尊厳が大切にされることだと思います。一方、私たちの世界には、貧富の格差や国家間の争いをはじめ、さまざまな理不尽なことがあります。平和は待っているだけで与えられるとは限らず、必要な時には、「平和をつくる」ことが求められているのではないでしょうか？平和でない状況、平和でない人々がいる時に、平和を阻害する問題の所在を知り、問題と向き合い解決していくことは「平和をつくる」ことです。憲法 12 条の前段では「この憲法が国民に保障する自由及び権利は、国民の不断の努力によって、これを保持しなければならない」としています。私たちの自由や基本的人権も単に与えられ享受しているだけではなく、この貴い自由と人権を守るために、私たちに不断の努力が求められています。このことは、「平和をつくる」という能動的な行為とも通じるように思います。「平和」とは「ある」ものではなく「つくる」ものなのかもしれません。

私は憲法 9 条の会つくばの共同代表をしています。9 条は陸海空軍その他の戦力の保持と国の交戦権を認めていません。今、現政権はこの 9 条に自衛隊を明記しようと目論んでいます。集団的自衛権を有する自衛隊を 9 条に明記することは、国の交戦権を認めない 9 条を無力化し、日本を戦争ができる国に変えてしまうことです。2022 年 12 月には敵基地攻撃能力や防衛費倍増を国会審議を経ずに、閣議決定してしまいました。

「平和」の対極にあるもの、それは対立、分断、暴力、争い、そして、その最たるものは「戦争」です。人を殺すことが正当化される狂った世界です。こんなあり得ない狂気がかつて私たちの国にもありました。そして現在も世界のどこかで紛争、戦闘が続いています。いったいなぜこんな理不尽なことがいつまでも続くのでしょうか？多くの国家は相手国から攻められないように、また万が一攻められても自衛できるように軍事力を強化し、軍事の抑止力を信奉しています。日本も

例外ではありません。世界で唯一の戦争による原爆被爆国でありながら、米軍の核兵器の抑止力を阻害するからとして私たちの国は核兵器廃絶のための「核兵器禁止条約」に調印していません。いったい軍事の抑止力とは本当に正しいのでしょうか？戦闘機や戦車や核兵器が戦争を抑止して、安全を保障しているのでしょうか？

近現代の歴史を顧みると、ほとんどすべてといっても言い過ぎでないと思いますが、国家間の戦争は、自衛の名の下に起こされています。自国民の生命、安全を守るため、国益を守るため、多くの戦争が起こされてきました。なぜでしょうか？様々な要因があるにしても、相手国の脅威、それも軍事的な脅威があるからです。相手国の脅威から自国を守るために、さらに相手より上回る軍事力を持とうとする、その繰り返しです。では聖書はこの点に関してどのようなメッセージを私たちに発しているでしょうか？マタイ 26 章 52 節には、有名な聖句である「剣をもとに収めなさい。剣を取る者はみな剣で滅びます。」が記録されています。主イエスは、自分自身が捕らえられようとしている危機的状況の土壇場で、弟子たちに、そして私たちに「剣を取る者はみな剣で滅びます。」と語っています。剣は武器、兵器です。現代で言えば陸海空の軍事力です。

陸海空軍その他の戦力と国の交戦権を認めない憲法 9 条とイエス・キリストのこのことばと行動との親和性を覚えます。9 条改悪の動きがある中、憲法 9 条を守り抜くことこそ現代日本において「平和をつくる者」となることだと、私は信仰に基づき示されています。私たちは誰もが「平和をつくる者」となる力を内に秘めています。私たちは自分の力ではできなくとも、平和の君であるイエス・キリストが共におられるので、主イエスが私たちを「平和をつくる者」として励まし、用いてくださるからです。日本各地で「平和をつくる者」が戦争反対を貫き、憲法 9 条を守り抜き、この世界で、平和をつくるために力を合わせていくことを願っています。

２０２４年１月１９日奨励
ヨハネの黙示録１５章６節「胸には金の帯を」
星出卓也（日本長老教会西武柳沢キリスト教会牧師）

ヨハネは天にある開かれた神殿から、七人の御使いが出てくるのを観ます。人が入ることが許されなかった至聖所が垂れ幕で覆われたのは、罪人が神の聖なる義の光に照らされて滅ぼされないためです。ところが先の 5 節ではその至聖所の垂れ幕は開かれていました。その開け放たれた神殿から、七つの御使いが出て来ます。七の数は神の神聖なご支配を表す数、そして七つの御使いは七つの災害を携えて、神の審判を行うために、聖なる至聖所から出てくるのです。この災いは「七つの災害」と書いてあるように、神の義のご支配を表すための災害で、罪人たちの築き上げた文明とそのあり方を裁くために、神の聖所から主の御使いたちが出てゆくのです。

その災害を行う神の御使いたちについて「**彼らは、きよい光り輝く亜麻布を着て、胸には金の帯を締めていた。**」と書いてあります。この描写は、この御使いたちの性質と役割を語っています。モーセが十戒の板を神から委ねられた時に、モーセの顔が肌から光を放ちました。そしてイスラエルはこのモーセの顔から放つ光を直視できませんでした。それはこの光が神の義の栄光からでる光だったからです。この光に照らされる全ての者が、自分の罪を明らかにされ、滅びに値する自分の罪を知らずにはいられません。それゆえイスラエルはモーセの顔から放つ光を観ることが耐えられずに、彼の顔に覆いをかけなければなりませんでした。

キリストの姿にも現われた胸に金の帯を締めた様子は、王の御心を忠実に行う王の忠実な僕を表しています。この垂れ幕が取り払われた至聖所から出てくる御使いたちも、同じく王である神の御心を忠実に行うために、至聖所から出てくるのです。聖なる神の義の栄光が輝くこの姿は、全ての者を慄かせ、罪人たちを恐れさせるそのような光であり、そのような金の帯です。世の罪はここに一掃され、この世の罪のあり方は、ここに裁かれることになるのです。

贖いの義の衣を持たない者はすべて、この光の前に慄いて、やがて徹底的に行われる神の義の審判の前に滅ぼし尽くされます。

今の時代で、それがどんなに栄えていようとも、この世の在り方はやがてこの神の審判の前に恐れおののく者となるようになります。その日が迫っていることを覚えて、今日も恐れ謹んで、滅びるべきこの世の習わしに従う歩みを捨て去り、主の恵みによって主の道を歩み続けたいと思います。